

5. 高度成長とともに発展した皆生温泉

<高度成長と観光ブーム>

- ・ 昭和 30 年前後より皆生温泉には続々と新しい旅館が建設されていくこととなる。日本が高度成長へと向かう流れに呼応しており、その後皆生温泉は急速な発展を遂げるものとなる。
 - ✓ 昭和 28 年 松露園（内田浅子）開業
 - ✓ 昭和 29 年 ひさご家（松本好野） うらく荘（内田保秀）開業
 - ✓ 昭和 30 年 白扇（福本文子）開業
 - ✓ 昭和 31 年 幸楽園（安田定義）開業
 - ✓ 昭和 32 年 司旅館（港花子） みくに家（松本照子） 松風閣別館（織田かめの）開業
 - ✓ 昭和 33 年 生駒（岡本鹿子）開業
 - ✓ そして、皆生温泉の一大拠点となった皆生温泉ヘルスランドが昭和 34 年にオープンすることとなる。

- ・ その後、皆生温泉の旅館は、近代的な設備を導入することとなる。
 - ✓ 昭和 36 年 清風荘が皆生温泉で初めて鉄筋コンクリート建てに改装した。
 - ✓ 昭和 39 年 東光園が 8 階建ての高層建築の旅館として生まれ変わった。当時、この二つの旅館が皆生温泉をリードする存在であった。
 - ✓ 昭和 42 年 皆生グランドホテル（伊坂定吉）の開業へとつながる。

- ・ 当時のことを皆生シーサイドホテル（旧司旅館）の社長は振り返る。
 - ☑ 伝承者 港紀一郎氏：
 - ✓ 淀江で港屋という料亭をやっていた。その頃、淀江や安来は米子の奥座敷ということで多くの料亭や旅館があった。淀江で細々と料亭をやっているのはダメだとの思いから、昭和 31 年 12 月の忘年会シーズンにあわせて司旅館をオープンさせた。
 - ✓ 当時、小学校の 5 年生であったが、開業に向けてどたばたしていたことを覚えている。旅館は、女将であった母親が切り盛りしていた。
 - ✓ 開業当時、宴会には必ず芸妓さんが入り夜の 12 時～1 時まで延々と続き、片づけると 3 時～4 時となることも良くあった。
 - ✓ 皆生温泉の街には、いたるところで芸妓さんの声が溢れていた。

- ・ 当時皆生温泉の知名度はまだ低かった。遠くの方から来られる方は少なかった。やはり三朝、玉造は一流であったとかたる。
- ・ 30～40 年代の団体旅行ブームになると遠方から宿泊客が詰めかけるようになり、鉄道を利用して新見や高梁など岡山県方面からのお客様があった。
- ・ しかし、まだまだ皆生温泉は日帰り客が多く、玉造温泉が独占していた出雲大社参りのお客様を是非とも取り込みたかった。当時、旅行情報の発信地は国鉄であり、お客様の国鉄ブランドへの信頼は厚かった。皆生温泉は国鉄との結びつきを強めて発展していった。

< 皆生温泉とお客様の足 >

- ・ 皆生温泉の玄関口である米子駅は山陰鉄道発祥の地であり、古くから交通の拠点として栄えた。
- ・ 当時、岡山からの出雲大社参拝する臨時列車がワンシーズン 60～80 本でしていた。玉造温泉が 95%、残りの 5%が三朝温泉に泊まるものであった。この頃の皆生温泉はまだ知名度が低く、老舗温泉地である玉造や三朝には及ばない状況であった。
- ・ 特に皆生温泉は冬場のお客様が少なく、どうしても出雲大社参拝のお客様がとりこみなかった。

☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：

- ✓ 米子鉄道管理局の旅客課の紹介で岡山の駅へ交渉に出かけた。
- ✓ 交渉はうまくいったのであるが、歓迎会をするという条件が付いた。玉造温泉では、お客様を歓迎するために安来節などを見せる歓迎会を行っており、皆生温泉でも同様の歓迎会をすることが条件となった。その頃完成した米子市公会堂（昭和 38 年完成）で盛大な歓迎会をして観光客を迎えることとした。

- ・ このような努力により、出雲大社参拝ツアーを玉造温泉と皆生温泉がほぼ半分半分を分け合うところまで漕ぎ着け、皆生温泉の名前も徐々に浸透してきた。
- ・ 昭和 39 年米子空港に東京便が就航し、山陰地方にも高速交通の波が押し寄せてきた。東京オリンピックの開催や東海道新幹線の開業など旅行の広域化が一気に進んだ。

☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：

- ✓ その頃、有名な温泉地としては、北陸、南紀、山陰であった。北陸は、新潟・富山・福井で北陸観光協会を作っており、組織的に観光振興を図っていた。南紀は、和歌山だけであったがお金を持っていた。
- ✓ それに比べ山陰は各温泉地が独自に集客を考えており、広域観光の時代に取り残されてしまうと考えた。そこで、玉造温泉に呼びかけて賛同を受け、三朝温泉にも声を掛けて山陰を広域で売り出すための山陰三名湯会ができた。
- ✓ 企画を提案した皆生温泉が事務局を持つこととなった。

- ・ 昭和 39 年 6 月に第一陣として東京へ宣伝活動に向かった

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」

- ✓ 東京ではサンケイホールを貸し切り、はじめに宣伝隊の PR、そして山陰民謡と踊りを紹介して、最後に封切りの洋画の上映で幕を閉じた。
- ✓ 洋画の人気もあってか大ホールも超満員の盛況であった。一行は翌日、東京、横浜、千葉と旅行業者を訪問し、米子 - 東京便の開設の宣伝と送客の依頼をして歩いた。

- ・ これが皆生温泉の広域観光への取り組みのはじまりであり、以降 24 年間関東をはじめ関西、九州などへ山陰の魅力をアピールして歩いた。現在、広域観光の重要性が叫ばれる中、約 40 年前から広域観光に注目していたことに驚きを感じる。
- ・ 昭和 47 年東京から新幹線が岡山へ開通し、国鉄による団体旅行が全盛を迎えた。
- ・ その頃の様子を清風荘の社長である森社氏は語る。

☑ 伝承者 森博道氏：

- ✓ 業者から電話がかかってきたとき半年前からでは遅いですよとよく言ったものだ。
 - ✓ 列車の切符が取れず、切符さえあればいくらでもお客様は待っている状況であった。
 - ✓ 大手業者に対してはキャラバン隊を出して直接訪問した。未処理のカルテが山積みとなっており条件の良い団体を選んでいた状態であった。
- ・ 昭和 45 年の大阪万博を境にマイカーのお客様が増え、モータリゼーションの波が押し寄せる。団体旅行もバス旅行が主流となり、皆生温泉の旅館各社も拳ってバス会社へと営業を行った。
 - ・ その後時代は進み、団体旅行から家族旅行・小グループによる旅行へと様変わりし、交通手段もマイカーへと変わっていった。消費者の志向も歓楽型の男性型消費から文化体験を重視する女性型消費へと変わっていった。しかし、成り立ちが歓楽型の皆生温泉にとって、消費者の変化への対応が遅れ、少し時代から取り残された感がある。

< 住民参加の町づくり >

- ・ 昭和 42 年の夏から行われるようになったのが皆生温泉まつりである。昭和 39 年皆生競馬場跡地にできた海浜公園を会場に盛大に行われた。公園に仮設の舞台を組み、民謡のど自慢、安来節保存会による安来節の披露や検番のきれいどころによる豪華な踊りなどが披露された。地元の人々はもちろん観光客まで飛び入りでお祭りを盛り上げたという。その後、地区の恒例行事として引き継がれていくこととなった。
- ・ 昭和 50 年代に入り地域全体で皆生温泉を盛り上げようとする気運が高まってきた。旅館、商店、住民などが一緒になって皆生温泉の活性化を考える皆生温泉推進協議会が設立された。その協議により生まれたのが、いで湯太鼓、子ども御輿である。
- ・ 当時、旅館組合の事務局長をしていた松田氏にその時の様子を聞くと。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 住民参加型の街づくりに向けて皆生温泉まつりの活性化が検討された。
 - ✓ いで湯太鼓を始めるために和太鼓を購入した。子ども御輿を数百万円かけて新調し、皆生音頭の踊りも始めた。現在の観光センターが建っているところで打ち上げをしたことを覚えている。皆生が一体となったという意味では推進協議会の取り組みは間違っていなかったと思う。
- ・ いで湯太鼓は、若手に運営を任せられ太鼓連が結成された。その中には、若手の芸妓も参加していた。
 - ・ 芸妓として太鼓連に参加していた元芸妓の美河氏によると。

☑ 伝承者 美河氏：

- ✓ 皆生温泉まつりのイベントとして「いで湯太鼓」を披露した。おもちゃ姉さん、なつこさん、ひろみさんなど芸妓が 7 人ぐらい参加していたと思う。サラシを巻き、法被を羽織り、頭には鉢巻きを巻いて。
- ✓ 男衆は地元の住民が中心であったと思う。清風荘まへの海岸でお客様へ披露した。一泊二日で見に来てくれたお客様もいて、その夜はお座敷に呼ばれた。

< 芸妓が行き交う粋な町 “ 皆生 ” >

- ・ 昭和 28 年 楽坂はん子の歌う皆生小唄がヒットし、皆生温泉は一躍全国に知られることとなった。一般家庭にテレビが普及するようになった昭和 35 年皆生温泉を舞台としたNHK連続ドラマ「チョコちゃん日記」が放映された。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」
 - ✓ 幸楽園、ひさご家を舞台にしたホームドラマで、一年間続いた人気番組であった。ロケは 3 日間で行われ、市内から見学者が押し寄せた。
- ・ このようにして全国的に有名となった皆生温泉であるが、昔の皆生温泉でイメージするのは芸妓さんの姿ではないだろうか。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」
 - ✓ 皆生温泉の場合は、お色気によって観光客にも地元にも人気があった。
 - ✓ 宴会にはきれいどころが必要で、客の需要に応え、しだいにその数を増していった。最盛期には芸妓の数が 180 人にも及び、山陰の熱海とさえ言われた。
- ・ 芸妓は、踊りや小唄などのお稽古をして芸や作法を磨いている。そんな芸妓さんは、みんな高いプライドを持っていた。皆生温泉内を移動するのも必ずタクシーを使っていた。そのため皆生には、多くのタクシー会社が営業所を構えていたが、全盛期にはとてもタクシーが足りない状況であったようだ。
- ☑ 伝承者 美河氏：
 - ✓ 置屋には、10 人ぐらいの芸妓が所属していた。置屋の中で人間関係が厳しくお姉さん方からいろいろと指導を受けた。毎日のようにお稽古に励んだ。宴席の中でお客様を楽しませる技を磨いた。
 - ✓ お客様も宴席の作法を知らないと遊べない。若い従業員は会社の飲み会で宴席での遊び方を学んだ。芸妓のおどりが終わるまでは絶対に動かない。社長が絶対的な存在で、芸妓さんが社長にお酌をするまでは他の社員はお酌ができなかった。
 - ✓ 宴が進み幹事の合図で初めてお酌ができた。
- ・ 当時、温泉旅館と芸妓は切っても切れない関係にあり、芸妓が手配できなければ旅館の営業ができない状態であった。
- ☑ 伝承者 森博道氏：
 - ✓ 昭和 40～50 年代にかけ当時の菊水旅館(現在菊萬)前の通りがメイン通りであり、浴衣姿のお客様とお座敷に向かう芸妓さんなどでごった返しすれ違うこともできないほどであった。芸妓さんは番傘に、巾着を持ち、日本髪をゆって、カランコロンとゲタをならしながら歩いていた。大変風情があり皆生温泉の名物でもあった。
- ・ 昭和 47 年のオイルショックの頃からお客様が激減してきた。また、カラオケの普及により芸妓が邪魔になったことも芸妓の減少に拍車をかけたという。
- ・ その後、コンパニオンが隆盛となってきてお座敷の数が激減し、今では皆生温泉の芸妓も数えるばかりとなっている。

< 皆生温泉あれこれ >

= 水族館 =

- ・ 皆生温泉には、その昔水族館があった。昭和 32 年オープンしたその水族館は、三条通りに面した現在の皆生つるやさんの北側に位置していた。
- ・ 当時、設備も、ノウハウもない状況の中でかなりの苦勞があった。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：

- ✓ 美保関から魚を買い付けたが、専用の運搬器具がないためトラックに水槽を積み込んで運んだ。夏場は水槽の水の温度が上がるため、安藤氷店から氷を買い水槽に浮かべたが、大量の魚が死にその処分に多くの時間を費やした。
- ・ 亀が網にかかると漁師から譲り受け飼育したこともあった。
- ・ 亀を越冬させることはできず、時期が来るとお酒を飲ませ海へ帰してあげた。海へ返す時に各メディアからの取材を受けて話題となった。
- ・ 飼育設備の整っていないことに加え、素人が管理に当たっていたことから限界があり昭和 40 年に閉館となった。間瀬氏は、当時のことを振り返り、現在の飼育設備があれば、また状況は違っていたのではないかと語る。
- ・ 皆生温泉は、海から湯が湧く温泉として有名であり、また目の前に海が広がるロケーションから海のイメージがとても強い。これまで紹介してきたように長年海との戦いを続けてきた皆生の人々にとっては「海=敵」のイメージが少なからずあるように感じる。
- ・ 海との戦いに一応の終止符が打たれた今、弱みであった海との関わりを一転して強みに変えていく取組も必要である。

= 皆生温泉と海上交通 =

- ・ 皆生温泉では、海を使った交通網の整備に取り組んだことがある。昭和 47 年日本道路公団により境水道大橋が完成し、古くから関係の深かった境港と対岸の美保関町が橋によってつながった。そのため境港～大根島～松江、米子～大根島～馬潟～松江などの航路を持ち、通勤や通学の足として利用されてきた航路が廃しに追い込まれた。
- ・ そこで、浮上してきた計画が皆生温泉と美保関間を結ぶ航路であった。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」

- ✓ 皆生海岸は砂浜で接岸が困難ではないかとの不安があったが、運輸局の許可を得て、試験運行となった。初日には旅館の従業員が 50 人ほど試乗した。心配された足場も道板のみで乗船できた。まずまずのスタートであったが、二度目の試乗会では若干の波もあったため、女性が足場を踏み外し海へ転落した。
- ✓ 安全性の面から浮き棧橋が必要と判断され、その後航路の話は消滅していった。
- ・ 昭和 40 年代後半、隠岐島が本格的な観光誘致活動を行い、隠岐島への観光が注目を集めてきた。広域観光の観点からも隠岐からの航路を確保することは大きなメリットとなる。皆生温泉と隠岐西ノ島町を高速フォークラフトで結ぶ計画が浮上した。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：

- ✓ 昭和 50 年頃、瀬戸内海で就航しているフォークラフトで皆生と西ノ島町を約 30 分でつなく計画であった。皆生温泉から隠岐までの日帰り観光が可能となる。
 - ✓ 隠岐への回路を皮切りに、東は鳥取砂丘、西は島根半島、日御碕、浜田、また、米子港、宍道湖までの観光遊覧なども構想にあった。三菱重工の担当者と打ち合わせを重ね運行管理については三菱重工側が行うことで基本的な合意ができていた。
 - ✓ しかし、運営の受け皿となる会社を設立する必要があり、その調整が付かず計画は立ち消えとなった。
-
- ・ 伝承者の出身地は隠岐西ノ島町であり、この計画には一方ならない思い入れがあったようである。今でもいつの日か皆生温泉に海路ができることを望んでおられるようだ。
 - ・ 皆生温泉は、米子からも少し離れており、公共交通機関の便は決してよくない。もし皆生温泉を起点とした海上交通網が整備されれば、その様相は一転するはずである。海上交通の技術も以前とは格段に進歩しているはずであり、今後の取組に期待がもたれる。